

国立国語研究所学術情報リポジトリ

白峰方言アクセント調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002502

白峰方言アクセント調査報告

中澤 光平*・松倉 昂平**・新田 哲夫***

1. 報告の概要

2017年1月、石川県白山市白峰において3名の話者に対して行ったアクセント調査に基づき、白峰方言のアクセント体系の概要を述べ、すべての調査項目のアクセントデータを掲載する。

本報告の構成は、2章がアクセント体系の記述、3章が調査内容の全一覧である。まず2.1節において名詞のアクセントをもとにアクセント体系の全体的な枠組みを記述する。2.2節では、名詞に接続する助詞の性質を取り上げる。助詞によってアクセント上の振舞いが様々に異なる例を示す。2.3節では、複合名詞を取り上げ、複合語アクセント規則を考察する。前部要素の式が複合語全体の式と一致するいわゆる「式保存(の法則)」が白峰方言においても概ね成り立つことを示す。2.4節では、2~4拍動詞の活用形アクセントを一覧する。3章では、2章で取り上げたデータも含む全ての調査項目についてその音調型を一覧し、適宜解説を加える。

本報告の分担は次の通り：1章と2.2節、2.4節は松倉、2.1節と2.3節は中澤が担当し、3章は全体として中澤、松倉の執筆である。新田は本調査を立案し調査の一部に参加した。また中澤・松倉の本報告のドラフトに基づき、必要なところは再調査し、加筆・訂正を行った。

本稿で用いる音調記号は次の通り：]...拍間の下降, !...拍間の小さな下降, [...拍間の上昇, ○]...拍内の大きな下降, ○!!...拍内の小さな下降。

2. 1 名詞のアクセント

白峰方言アクセント体系の全体的な枠組みの概要も兼ね、名詞のアクセント体系についてまとめる。ここでは名詞単独のアクセント型を中心に扱い、助詞が付いた形は次節で扱う。

名詞に基づいた白峰方言のアクセント体系は次の(1)のようになる。

* 東京大学大学院博士後期課程／与那国町教育委員会嘱託員

** 東京大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員

*** 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系／国立国語研究所客員教授

(1) 名詞（単独形）の音調（5拍語まで）

型	1拍語	2拍語	3拍語	4拍語	5拍語
k0	蚊[カー!!]	庭ニ[ワ!!]	ク[ル!マ]	ア[サ!ガオ]	コ[ド!モムケ]
k1	葉[ハ]ー	山[ヤ]マ	[オ]ノコ	[ア]オゾラ	[シ]アサツテ
(k2?)		———	[オン]ナ	[セン]セー	[○○]○○○?
k3			———	カ[ネ!モ]チ?	ク[リ!バ]ヤシ
k4				———	ス[ズ!リバ]コ
h0	手[テ]ー	海ウ[ミ]	ヒ[ダ]リ	タ[ケ]ノコ	ヒ[ダ]リムキ
h2		———	オ[ト]ナ	ナ[デ]シコ	カ[タ]グルマ?
h3			———	ム[ラサ]キ	ミ[ソズ]クリ
h4				———	ク[スリバ]コ

表中の「———」はその型に属する語が理論上あり得るが実際は存在しないと思われるもの。斜線は理論上も存在しないと思われる型。「○」で表した型は今回の調査では語例が得られなかったものの存在する可能性があるもの。表の語例は今回調査した複数の話者に安定して見られたものを中心に選んだが、中には1人の話者でのみ確認された型もある（ム[ラサ]キなど。）

白峰方言のアクセント型は2つの式および下げ核の有無と位置で表すことができる。すなわち、自然下降よりも大きな下降（半下降）を伴う下降式（k式）とそれのない平進式（h式）の2式および次の拍を下げる働きを持つ下げ核（ \downarrow ）である。

k式の半下降は2拍目と3拍目の間に現れる（o[o!o...）ため、核が1拍目と2拍目にある場合は両式が対立しない。しかし、2拍語と3拍語で1拍目に核がある型（1型）は助詞「の」が付いた場合の振舞いや複合名詞の前部要素となった場合のアクセントからk式に当たると見なした方が良いため、本稿ではk1として扱う。2拍目に核がある型（2型）は事情が異なる。3拍語2型の場合、「の」がついた場合の振舞いからはh式と見た方が良いが、動詞の活用形や複合名詞のアクセントからはどちらとも決めがたく、中和しているとも考えることもできる。ただし、実際にはこの2型と対立すると考えられるk2型が活用形や助詞付きの形では存在することから、名詞に見られる一般的な2型はh2とするのが妥当だろう。

1型をk式とするのは先行研究と大きく異なる。特に3拍以上の動詞の場合、1型はむしろ（「出来る」を除き）h式と見られる振舞いを示す。3拍名詞の一部もh式と見るべき振舞いを示すが、本稿では名詞のアクセントを重視してk1に統一する。

k式の半下降は語末に来る場合は拍内下降 (!!)として実現するが、この下降は強化されて]] となったり、あるいは全く実現しないこともある。ここでは !! をその代表的な形とした。

(1)に1拍語として挙げた語は実際には長呼され常に2拍相当になるが、諸方言との対応から便宜上2拍語とは別とした¹。アクセント上は2拍語との違いはない。

次に、アクセント解釈上いくつかの問題となる点を挙げる。

¹ 複合語の構成要素になった場合の長さなどが1拍語として扱う根拠となり得るかもしれない（ただしナーバタ「大根畑」のような例もあり、未詳）。

両式とも1拍目はやや低く始まるのが基本だが、2拍目が撥音、長音、二重母音後部イの場合、1拍目から高く始まる(例:k0...稗[へー!!、氷[コー!リ、[カイ!ガラ、[アイ!ダガラ、h0...棒[ポー、[タンゴ、[テンジョー、k2?...女[オン]ナ、h2...女[メー]ロ)。k1はもちろん語頭から高い。

撥音、長音、二重母音後部イはそれぞれ核を担い得ると考えられる(女[オン]ナ、女[メー]ロ、[セン]セー、[ヒョー]タン、[ツイ]タチ)。ただし、4拍語についてはh2なのかk2なのかは決定しがたい。

1型では袋[フ.ク]ロのように無声化によって下降位置が後ろにずれることがある。無声化が関わらない場合でも、[ウシ]ロ、[ハシ]ラのようにしばしばずれる。(ウシロは他の話者でh2の型もある)。女[オン]ナもその一つと考えk1と解釈することもできるが、[パン]ツ、[ゼ]ンマイのようにずれない語もあるため、(1)では疑問としつつk2と解釈した。

表のk3型は(h)2型と非常に紛らわしい。名詞+助詞、動詞の活用形、複合名詞のアクセントなどから、一応この型を認めるべきと考えるが、[セン]セー、[ヒョー]タン、[ツイ]タチの型の認定と併せなお詰めるべき課題がある²。

2. 2 名詞に付く助詞の振舞い

名詞に続く助詞の振舞い(助詞も含めた文節全体の音調)は助詞の種類により大きく異なり、「名詞+助詞」の音調は、名詞の音調型に加え助詞固有の性質を参照しなければ定まらない。白峰方言には、アクセント上の振舞いが異なる次の3種の助詞が確認される：①名詞の音調型を変えない無標の助詞(「が」「を」「から」)、②助詞が名詞に低く付くかあるいは核を持つ有核の助詞(「も」「まで」)、③原則として有核語に付く場合その語を無核化する特殊な助詞(「の」)。

(2) 2,3拍名詞+1拍助詞(が、も、の)の音調

語・型	+が(無標)	+も(有核)	+の(特殊)
海 h0	ウ[ミガ(h0)	ウ[ミ]モ(h2)	ウ[ミノ(h0)
庭 k0	ニ[ワ!ガ(k0)	[ニワ]]モ(k2)	ニ[ワ!ノ(k0)
川 k1	[カ]ワガ(k1)	[カ]ワモ(k1)	カ[ワ!ノ(k0)
左 h0	ヒ[ダリガ(h0)	ヒ[ダリ]モ(h3)	ヒ[ダリノ(h0)
大人 h2	オ[ト]ナガ(h2)	オ[ト]ナモ(h2)	オ[トナノ(h0)
車 k0	ク[ル!マガ(k0)	ク[ル]マモ(k3)	ク[ル!マノ(k0)
男 k1	[オ]ノコガ(k1)	[オ]ノコモ(k1)	オ[ノ!コノ(k0)
女 k2	[オン]ナガ(k2)	[オン]ナモ(k2)	[オン!ナノ(k0)

助詞「も」はそれ自身が名詞に低く付く。下降式無核(k0)の語に付く場合、下降式音調の半下降が大きな下降に強化される現象「下降強化」を生じる。(2)の通り「庭(k0)+も」は、2拍目が特殊拍でなくても1拍目から高く発音される傾向にあり、2拍目内部に大きな下降が生じる音調を取る([ニワ]]モ)。他の型([カ]ワモ(k1)、ウ[ミ]モ(h2))と音声的に接近するが対立は保持さ

² [セン]セー、[ヒョー]タン、[ツイ]タチもh2、k2以外にk3と解釈できる可能性がある。

れ、文節全体としては k2 と解釈されうる。

「車(k0)+も」は、「も」自身が無核語に低く付く——「も」の直前に核を生じるとも言い換えられる——性質から、h0 型に「も」が付いた場合 (ヒ[ダリ(h0) > ヒ[ダリ]モ(h3)) と平行的に、音韻的には文節全体として k3 と解釈されうる (ク[ル!マ(k0) > ク[ル!マ]モ(k3))。ただし、2 拍目の直後に「下降強化」が生じる結果 (ク[ル!マ]モ > ク[ル]マモ)、音声的には「大人(h2)+も」と中和する。

助詞「の」が 1 型語に付いて無核化した文節は原則として下降式無核 (k0) となるが、これに反して、文節全体で非下降式無核となる 1 型語も存在する (例:[マ]クラガ「枕が」/マ[クラノ~マ[ク!ラノ「枕の」)³。「非下降式 2 型 (h2) + の」は、非下降式無核となるかあるいは無核化しない場合もある (例:フ[タ]ツノ「二つの」、フ[タ]リノ「二人の」)。まとめると、「1 型+の」は k0 または h0, 「非下降式 2 型+の」は h0 または h2 となる。「の」が付いた結果どちらの型を取るかは語彙的に決められるものなのか、もしそうであれば何らかの歴史的な背景が見いだせるのか明らかにするためには、より多くの語について「の」を続けた際の振舞いを調べる必要がある。

2. 3 複合名詞のアクセント

複合名詞のアクセントについて、話者間で概ね一致する語をまず挙げる。

(3) 複合名詞のアクセント型 (比較的安定していたもの)

複合語	前部要素の型 (k 式)	複合語の型	複合語	前部要素の型 (h 式)	複合語の型
カネズカイ	k0	k0/h2	マツバヤシ	h0	h3/h0,h2
カガミバコ	k1	k4	ミソズクリ	h0	h3/h0
コドモムケ	k0	k0	クスリバコ	h0	h4
スズリバコ	k1	k4	ヨモギモチ	h0	h4
タカラバコ	k1	k4	ミカンバコ	h2	h3
ドーグバコ	k1	k4	クスリギライ	h0	h4
ヒガシガワ	k1	k0/h0	ハダカマツリ	h0	h4
ヒガシムキ	k1	k0/h0	ハタケシゴト	h0	h4
ムコーガワ	k0	k0			
モミジガリ	k1	k4			
ウチワズクリ	k1	k4/h4			
サクラマツリ	k0	k4/h4			
モミジマツリ	k1	k4/h4			
サクラモチ	k0	h4			

³ 「枕」の他、「頭の」「後ろの」も k0 と h0 両方現れる (ア[タ!マノ~ア[タマノ, ウ[シ!ロノ~ウ[シロノ)。なお「枕」と「頭」は「も」を付けた際に h0 語相当の音調 (マ[クラ]モ, ア[タマ]モ) を取り、「~の」の音調と合わせると、あたかも k1 と h0 を併用 (混用) するような振舞いを示す。

オトコギライ	k1	h4//k4		
ココロズカイ	k1	h4//k4		
コトバズカイ	k1	h4//k0,h0		
チカラシゴト	k1	h4		
オトコトモダチ	k1	h4		
デンキガミノソリ	—	h4//h5		

(//の右側は少数見られた型。 , は併用など複数の型が出たことを示す。)

前部要素が k 式の場合と h 式の場合に分けた。(一部前部要素の型が不明なものがある。)

これを見ると、前部要素の式がほぼ複合語全体の式に対応することがわかる。特に、前部要素が h 式の場合は複合語の式は例外なく h 式となっている。これに対して、前部要素が k 式の場合は複合語全体も k 式になる傾向が認められるものの、一部 h 式になっているものが見られる。特に k1 に例外が見られるため (5 例)、1 型を k 式と解釈することの反例と見えるかもしれないが、一方で 1 型が k 式に対応する例も 9 例あり、一応 k 式になる傾向が強いと言える。

まとめると、前部要素が k1 の場合を中心に若干の例外を含むが、白峰方言でも複合名詞の式保存則は概ね成り立っていると言える。

ここで、複合名詞のアクセントに関する若干の問題を扱う。それは複合語全体のアクセントが h2 (相当) になる場合である。諸方言で規則が比較的に見えやすい後部 3 拍の語を挙げる。

(4) 後部 3 拍複合名詞のアクセント型

複合語	前部要素の 型 (k 式)	複合語の型	複合語	前部要素の型 (h 式)	複合語の型
ハナバタケ	k1	h2	ムギバタケ	h0	h2//h3,h0
モモバタケ	k0	h2//h4?	ハリシゴト	h0	h2,h3
ニワシゴト	k0	h2//h3	マツバヤシ	h0	h3//h0,h2
ヤマシゴト	k1	h2//h3	イキズカイ	h0	h3,h0
ナツマツリ	k1	h2//h3	カタグルマ	h0	h2,h0
アキマツリ	k1	h2//h3	イトグルマ	h0	h2,h0
タケバヤシ	k0	h2	ミノズクリ	h0	h3//h0
クリバヤシ	k1	h2			
カネズカイ	k0	k0//h2			
ヒトズカイ	k1	h3,h2,k0			
カザグルマ	k0	h2			
コメズクリ	k1	h2//h3			
クニズクリ	k0	h2			
チカラシゴト	k1	h4	ハタケシゴト	h0	h4
サクラマツリ	k0	k4//h4	ハダカマツリ	h0	h4
モミジマツリ	k1	k4//h4	クスリギライ	h0	h4

サカナギライ	k0	k4,h4		
ワサビギライ	k1	k4,h4		
ウチワズクリ	k1	k4//h4		
カタナズクリ	k1	k4,h4		
オトコギライ	k1	h4//k4		
コトバズカイ	k1	h4//k0,h0		
ココロズカイ	k1	h4//k4		
キューリズクリ	k1	h4,k4		

前部要素が3拍、後部要素3拍の場合、核の位置は4拍目（語末から数えてマイナス3拍目）で安定しており、やはり例外は含みつつも式保存の傾向が見られる。しかしながら、前部要素が2拍の場合、核の位置が2拍目（語末から数えてマイナス4拍目）に来る例が相当数見られる。2型は式が中和してh式になるため、この場合式保存は認められないことになる。前部要素2拍の複合名詞でマイナス4拍目に核が来るのは江戸時代以前の京都などにおけるアクセント規則の反映を思わせるが、前部要素がh式の場合にはある程度3型（マイナス3拍目）も見られるため、特に前部要素がk式の場合、一部はk3の可能性もある（o[o!o]oo）。前部要素がh式でも複合名詞全体がh2にある例も相当数あるので、全てをk3と見なすことはできないが、k3型の認定およびh2との対立の有無を含め、さらなる調査が必要である。

2. 4 動詞のアクセント

2～4拍動詞の8つの活用形（基本形（終止形）、否定形、勧誘形、命令形、タ形（過去形）、テミル形、チョル形、テ形命令形）のアクセントを一覧する。勧誘形は一段動詞でオ段拗音を生じる（例：ジョー「出よう」、オキョー「起きよう」）。テミル形は「試しに～してみる」の意。チョル形とはテ形+居るに由来するアスペクト形式で「～している」に相当する。

以下では、ある動詞の一連の活用形とその音調型を指して活用系列と呼び、例えば基本形がk0である活用系列はk0系列と呼ぶ（基本形がh0ならばh0系列）。

(5) 2拍一段動詞

	k0系列「着る」	h0系列「出る」
基本	キ[ル!! (k0)	デ[ル (h0)
否定	[キン!! (k0)	[デン (h0)
勧誘	[キョー!! (k0)	[ジョー (h0)
命令	[キ]ー (k1)	[デ]ー (k1)
タ形過去	キ[タ]] (k1)	[デ]タ (k1)
テ+ミル	キ[テ!ミル (k0)	デ[テ!ミル (k0)
チョル	キ[チョ]]ル (k2?)	[デチョ]]ル (k2?)
テ形命令	キ[テ!! (k0)	デ[テ!! (k0)

2拍一段動詞には基本形が **k0** または **h0** になる2つの活用系列がある。

キ[タ]「着た」は1拍目の母音が無声化するために下降が後退した形であり音韻的には **k1** と解釈できる。

チョル形は2拍目内部に鋭い下降を生じる音調である。[o]oo(**k1**)型ともo[o]o(**h2**)型とも異なり、**k2** と解釈されうる。

(6) 2拍五段動詞

	k0 系列「置く」	h0 系列「書く」	k1 系列「居る」
基本	オ[ク!! (k0)	カ[ク (h0)	[オル (k1)
否定	オ[カ!ン (k0)	[カ]カン (k1)	[オ]ラン (k1)
勧誘	オ[コ!ー (k0)	[カ]コー (k1)	[オ]ロー (k1)
命令	[オ]ケ (k1)	カ[ケ (h0)	[オ]レ (k1)
タ形過去	[オ]イタ (k1)	[カイ]タ (h0)	[オ]ッタ (k1)
テ+ミル	[オイ!テミル (k0)	[カイ]テミル (h0)	オッ[テ!ミル (k0)
チョル	[オイ]チョル (k3?)	[カイ]ョル (h3)	—
テ形命令	[オイ!テ (k0)	[カイ]テ (h0)	オッ[テ!! (k0)

2拍五段動詞には基本形が **k0**, **h0**, **k1** で対立する3つの活用系列がある。**k1** 系列には「居る」1語のみ属する。3つの系列が全て対立するのは基本形においてのみであり、否定形と勧誘形では **h0** 系列と **k1** 系列が、チョル形を除くその他の活用形では **k0** 系列と **k1** 系列が同じ型で現れる。

テミル形は、[オイ!テミルや[カイ]テミル全体で **k0** や **h0** と見るか、あるいは[オイ!テ+ミ][ル (**k0+h0**) 及び[カイ]テ+ミ][ル (**h0+h0**) とも解釈できる。

[オイ]ョルのアクセント型をそれ自身の音調のみから一義に確定することは難しいが、チョル形が「居る」([オル])に由来する核(...ョル)を持つこと、「置く」の他の活用形が下降式で一貫することから、**k3** と解釈されうる⁴。3拍一段動詞のア[ゲ]ョルも同様。

⁴ ○[○]○○型または[○○]○○型に実現する語の解釈を巡っては、名詞のアクセントの解釈でも問題になったように、**h2** と **k3** いずれに解釈すべきか決着が付かない場合がある。これら2つの型(○[○]○○(**h2**)と○[○!○]○(**k3**))は音声的にごく接近・ほぼ中和し聞き分けが困難になっている場合が多いためである。動詞の場合は、同じ系列の他の活用形や他の系列の同じ活用形の音調と照らし合わせ、体系全体の規則性がより高くなる解釈を採るという方法がある。従来の新田の報告のように、動詞パラダイム内の式の一貫性を重視しようとする立場がそうである。この場合、名詞一般の体系とは異なり、キタ(着た、来た)、オイタ(置いた)の**k1**の他にも、オイチョル(置いちよる)、アゲョル(上げちよる)、カサネタ(重ねた)等に**k2**を認めようとする。この報告では、名詞一般の解釈と動詞活用の解釈をなるべく一貫させ、**k2**と**h2**は中和して**h2**で現れるという立場をとっている。また先にあげた**h2**(**k2**と中和している)と**k3**の対立の曖昧さについては、そのどちらからを選択するかは理論的な推測の域を出ないという意味を含めて、表中の音調型横に(?)を付ける。ただし、後の3拍五段動詞で述べるようにアガッタについては、その音調型と第3モーラ促音であるために**k3**ではなく、**k2**を例外的に認めている。

(7) 3拍一段動詞

	k0 系列「上げる」	k1 系列「下げる」	「できる」
基本	ア[ゲ!ル (k0)	[サ]ゲル (k1)	[デ]キル (k1)
否定	ア[ゲ!ン (k0)	[サ]ゲン (k1)	[デ]キン (k1)
勧誘	ア[ギョ!ー (k0)	[サ]ギョー (k1)	[デ]キョー (k1)
命令	[ア]ゲ (k1)	サ[ゲ (h0)	—
タ形過去	[ア]ゲタ (k1)	サ[ゲタ (h0)	[デ]キタ (k1)
テ+ミル	ア[ゲ!テミル (k0)	サ[ゲテミル (h0)	デキ[テ!ミル (k0)
チョル	ア[ゲ]チョル (k3?)	サ[ゲ]チョル (h3)	デキ[チョ]]ル (k3)
テ形命令	ア[ゲ!テ (k0)	サ[ゲテ (h0)	[デキ!テ (k0)

3拍一段動詞には以上3つの活用系列がある。「できる」の系列にはこの1語のみが属する。「できる」は基本形、否定形、勧誘形がk1となりk1系列と一致するが、タ形とテ形由来の活用形ではk0系列と一致する。

デキ[テ!ミルは2拍目キの母音が無声化するために下降が1拍後退した形である(2拍目が促音の場合も同様に下降位置が後退する。cf. オッ[テ!ミル「居ってみる」)。またデキ[チョ]]ルも本来ア[ゲ]チョルのように2拍目直後に生じる下降が無声化の影響で1拍後退した音調と推定される。

(8) 3拍五段動詞

	k0 系列「上がる」	k1 系列「下がる」	h0 系列「歩く」
基本	ア[ガ!ル (k0)	[サ]ガル (k1)	ア[ルク (h0)
否定	ア[ガ!ラン (k0)	[サ]ガラン (k1)	ア[ルカン (h0)
勧誘	ア[ガ!ロー (k0)	[サ]ガロー (k1)	ア[ルコー (h0)
命令	[ア]ガレ (k1)	[サ]ガレ (k1)	ア[ル]ケ (h2)
タ形過去	[アガ]]ッタ (k2)	[サ]ガッタ (k1)	ア[レイ]タ (h3)
テ+ミル	ア[ガ!ッテミル (k0)	サ[ガッテミル (h0)	ア[レイテミル (h0)
チョル	ア[ガ!ッチョ]ル (k4)	サ[ガッチョ]ル (h4)	ア[レイ]チョ]ル (h4)
テ形命令	ア[ガ!ッテ (k0)	サ[ガッテ (h0)	ア[レイ]テ (h0)

3拍五段動詞には基本形がk0, k1, h0で現れる3つの活用系列がある。基本形、否定形、勧誘形、タ形において3つの系列が対立し、命令形ではk0系列とk1系列、テ形由来の活用形ではk1系列とh0系列が同じ型を取る。

[アガ]]ッタは、[サ]ガッタと比べてやや下降が遅れるように聴かれる。確実に語頭から高く、ア[ガ]ッタでもない。k1でもh2でもないこの音調はk2と解釈されうる。他の活用形がほぼ下降式で一貫することも傍証の一つとなる。

(9) 4拍一段動詞

	k0 系列「重ねる」	k1 系列「集める」	h0 系列「隠れる」
基本	カ[サ!ネル (k0)	[ア]ツメル (k1)	カ[クレル (h0)
否定	カ[サ!ネン (k0)	[ア]ツメン (k1)	カ[クレン (h0)
勧誘	カ[サ!ニョー (k0)	[ア]ツミョー (k1)	カ[クリョー (h0)
命令	カ[サ]ネヨ (k3?)	[ア]ツメヨ (k1)	カ[クレ]ヨ (h3)
タ形過去	カ[サ]ネタ (k3?)	[ア]ツメタ (k1)	カ[クレ]タ (h3)
テ+ミル	カ[サ!ネテミル (k0)	ア[ツメテミル (h0)	カ[クレテミル (h0)
チョル	カ[サ!ネチョ]ル (k4)	ア[ツメチョ]ル (h4)	カ[クレチョ]ル (h4)
テ形命令	カ[サ!ネテ (k0)	ア[ツメテ (h0)	カ[クレテ (h0)

4拍一段動詞には基本形が k0, k1, h0 で対立する3つの活用系列がある。k0 系列のタ形はカ[サ]ネタであり、3拍五段動詞の k0 系列タ形 ([アガ]ツタ(k2)) のように[カ]サネタ～[カサ]ネタとはならない。k2 ではないとして h2 と解釈すれば、活用形間の式の一貫性を乱す。k0 系列のタ形・命令形については、他の活用形が下降式で一貫すること、h0 系列のタ形・命令形が3型(カ[クレ]タ・カ[クレ]ヨ)であることから、k3 と解釈されうる。4拍五段動詞の k0 系列タ形・命令形についても同様。

(10) 4拍五段動詞

	「働く」	「謝る」	「頂く」
基本	ハ[タ!ラク (k0)	[ア]ヤマル (k1)	イ[タダク (h0)
否定	ハ[タ!ラカン (k0)	[ア]ヤマラン (k1)	イ[タダカン (h0)
勧誘	ハ[タ!ラコー (k0)	[ア]ヤマロー (k1)	イ[タダコー (h0)
命令	ハ[タ]ラケ (k3?)	[ア]ヤマレ (k1)	イ[タダ]ケ (h3)
タ形過去	ハ[タ]ライタ (k3?)	[ア]ヤマッタ (k1)	イ[タダ]イタ (h3)
テ+ミル	ハ[タ!ライテミル (k0)	ア[ヤマッテミル (h0)	イ[タダイテミル (h0)
チョル	ハ[タ!ライチョ]ル (k5)	ア[ヤマッチョ]ル (h5)	イ[タダイチョ]ル (h5)
テ形命令	ハ[タ!ライテ (k0)	ア[ヤマッテ (h0)	イ[タダイテ (h0)

4拍五段動詞には基本形が k0, k1, h0 で現れる3つの活用系列がある。3拍五段動詞・4拍一段動詞と共通する点が多い。

同じ動詞の一連の活用形に様々な型が現れる通り、基本形の音調型から他の活用形の型を正しく推測することは難しいが、いくつかの傾向は見て取れる。例えば否定形と勧誘形は基本形と同じ型となる(例外は2拍五段動詞 h0 系列。カ[ク(h0), [カ]カン(k1), [カ]コー(k1))。また、テ形由来の活用形は k0 系列が下降式, k1 系列と h0 系列が非下降式となる(2拍一段動詞 h0 系列と「居る」「できる」の2語は例外)。

(11)系列別テミル形の音調型

	k0 系列	k1 系列（「できる」除く）	h0 系列
2 拍一段	キ[テ!ミル (k0)	—	デ[テ!ミル (k0)
2 拍五段	[オイ!テミル (k0)	オッ[テ!ミル (k0)	[カイテミル (h0)
3 拍一段	ア[ゲ!テミル (k0)	サ[ゲテミル (h0)	—
3 拍五段	ア[ガ!ッテミル (k0)	サ[ガッテミル (h0)	ア[ルイテミル (h0)
4 拍一段	カ[サ!ネテミル (k0)	ア[ツメテミル (h0)	カ[クレテミル (h0)
4 拍五段	ハ[タ!ライテミル (k0)	ア[ヤマッテミル (h0)	イ[タダイテミル (h0)

3. 資料編 ——調査項目一覧——

(12)2 拍名詞+1,2 拍助詞の音調

語・型	単独	+が・に	+から	+も (有核)	+まで (有核)	+の (特殊)
海 h0	ウ[ミ。]	ウ[ミガ	ウ[ミカラ	ウ[ミ]モ	ウ[ミマ]デ	ウ[ミノ
山 k1	[ヤ]マ。	[ヤ]マガ	[ヤ]マカラ	[ヤ]マモ	[ヤ]ママデ	ヤ[マ!ノ
川 k1	[カ]ワ。	[カ]ワガ	[カ]ワカラ	[カ]ワモ	[カ]ワマデ	カ[ワ!ノ
舟 h0	フ[ネ。]	フ[ネガ	フ[ネカラ	フ[ネ]モ	フ[ネマ]デ	フ[ネノ
庭 k0	ニ[ワ!!。 ~ニ[ワ。]	ニ[ワ!ガ	ニ[ワ!カラ	[ニワ]]モ ~ニ[ワ]]モ	ニ[ワ]マデ	ニ[ワ!ノ
口 k0	ク[チ!!。 ~ク[チ。]	ク[チ!ガ	ク[チ!カラ	ク[チ]]モ	ク[チ]マデ	ク[チ!ノ
箱 k0	ハ[コ!!。 ~ハ[コ。]	ハ[コ!ガ	ハ[コ!カラ	[ニワ]]モ ~ニ[ワ]]モ	ハ[コ]マデ	ハ[コ!ノ
雨 h0	ア[メ。]	ア[メガ	ア[メカラ	ア[メ]モ	ア[メマ]デ	ア[メノ
雪 k1	[ユ]キ。	[ユ]キガ	[ユ]キカラ	[ユ]キモ	[ユ]キマデ	ユ[キ!ノ
窓 h0	マ[ド。]	マ[ドガ	マ[ドカラ	マ[ド]モ	マ[ドマ]デ	マ[ドノ
音 k1	[オ]ト。	[オ]トガ	[オ]トカラ	[オ]トモ	[オ]トマデ	オ[ト!ノ

(13)特殊拍を含む2 拍名詞+1,2 拍助詞の音調

語・型	単独	+が・に	+から	+も (有核)	+まで (有核)	+の (特殊)
棒 h0	[ボー。]	[ボーガ	[ボーカラ	[ボー]モ	[ボーマ]デ	[ボーノ h0
象 k1	[ゾー。]	[ゾーガ	[ゾーカラ	[ゾー]モ	[ゾーマ]デ	[ゾーノ k1
稗 k0	[へー!!。]	[へー!ガ	[へー!カラ	[へー]モ	[へー]マデ	[へー!ノ k0
パン k1	[パン。]	[パンガ	[パンカラ	[パン]モ	[パンマ]デ	[パン!ノ k0
盆 h0	[ボン。]	[ボンニ	[ボンカラ	[ボン]モ	[ボンマ]デ	[ボンノ h0
盆 k0	[ボン!!。]	[ボン!ガ	[ボン!カラ	[ボン]]モ	[ボン]マデ	[ボン!ノ k0
貝 k1	[カイ。]	[カイガ	[カイカラ	[カイ]モ	[カイヤ]デ	カ[イ!ノ k0
灰 k0	[ハイ!!。]	[ハイ!ガ	[ハイ!カラ	[ハイ]]モ	[ハイ]マデ	ハ[イ!ノ k0
皆 k1	[シナ]]。]	[シナ]ガ	[シナ]カラ	[シナ]]モ	[シナ]マデ	[シナ]]ノ k1
赤ん坊	ン[ナ。]	ン[ナガ	--	ン[ナ]モ	ン[ナマ]デ	ン[ナノ h0

h0

※盆(h0)は盂蘭盆会の盆。盆(k0)は容器の盆(トレイ)。

2拍 k0 語の単独発話ではしばしば下降式特有の半下降調 (o[o!!) が実現せず h0 の音調 (o[o) にごく接近するが、2 拍目が特殊拍 (重音節) の 2 拍語の場合、半下降調 ([oo!!) が安定的に現れる。

1 拍目が撥音の有核語 (ンナ「皆」) は、一貫してその下降が 2 拍目内部または 2 拍目直後に実現するが、特定の拍構造に対して k1 が取りうる実現型の一つと解釈でき、音韻的には k1 である。

原則として、k1 語に助詞「の」が接続すると無核化して文節全体で k0 となるが、一部の k1 語は元の核を保持する ([ゾーノ「象の」、[ンナ]ノ「皆の」)。「の」を付したときの振舞いは語彙的に決まるのか等、詳細は不明である。「2 拍 k1 語+の」の無核化の有無 (どの語が無核化するか・しないか) にはまた個人差もあり、助詞「の」の性質が変化する過渡期にあるのではないかと推測される。

(14)3 拍名詞+1 拍助詞の音調

語・型	単独	+が・に	+も (有核)	+の (特殊)
車 k0	ク[ル!マ。	ク[ル!マガ	ク[ル]マモ	ク[ル!マノ
頭 k1	[ア]タマ。	[ア]タマガ	ア[タマ]モ～[ア]タマモ	ア[タ!マノ～ア[タマノ
枕 k1	[マ]クラ。	[マ]クラガ	マ[クラ]モ	マ[クラノ～マ[ク!ラノ
左 h0	ヒ[ダリ。	ヒ[ダリガ	ヒ[ダリ]モ	ヒ[ダリノ
袋 k1	フ[ク]ロ。	フ[ク]ロガ	フ[ク]ロモ	フ[ク!ロノ
氷 k0	[コー!リ。	[コー!リガ	[コー]リモ	[コー!リノ
大人 h2	オ[ト]ナ。	オ[ト]ナガ	オ[ト]ナモ	オ[トナノ
後ろ k1	[ウ]シロ。	[ウ]シロニ	[ウ]シロモ	ウ[シロノ～ウ[シ!ロノ
男 k1	[オ]ノコ。	[オ]ノコガ	[オ]ノコモ	オ[ノ!コノ
女 k2	[オン]ナ。	[オン]ナガ	[オン]ナモ	[オン!ナノ
女 h2	[メー]ロ。	[メー]ロガ	[メー]ロモ	[メーロノ
命 k1	[イ]ノチ。	[イ]ノチガ	[イ]ノチモ	イ[ノ!チノ
心 k1	[コ]コロ。	[コ]コロガ	[コ]コロモ	コ[コ!ロノ
柱 k1	[ハ]シラ。	[ハ]シラガ	[ハ]シラモ	ハ[シ!ラノ
鼠 h0	ネ[ズミ。	ネ[ズミガ	ネ[ズミ]モ	ネ[ズミノ
田圃 h0	[タンボ。	[タンボガ	[タンボ]モ	[タンボノ
二つ h2	フ[タ]ツ。	フ[タ]ツガ	フ[タ]ツモ	フ[タ]ツノ
二人 h2	フ[タ]リ。	フ[タ]リガ	フ[タ]リモ	フ[タ]リノ

助詞「の」が接続すると原則として 1 型は下降式無核に転じるが、一部非下降式無核に転じる語も確認される (「枕」「後ろ」)。

フ[ク]ロ「袋(k1)」は 1 拍目の母音が無声化するために音調のピークが 2 拍目に後退したものと解釈できる。

(15)1 拍名詞+1,2 拍助詞の音調

語・型	単独	+が	+も (有核)	+から	+まで (有核)
蚊 k0	[カー!!。	[カー!ガ	[カー]]モ	[カー!カラ	[カー]マデ
血 k0	[チー!!。	[チー!ガ	[チー]]モ	[チー!カラ	[チー]マデ
葉 k1	[ハ]ー。	[ハ]ーガ	[ハ]ーモ	[ハ]ーカラ	[ハ]ーマデ
日 k1	[ヒ]ー。	[ヒ]ーガ	[ヒ]ーモ	[ヒ]ーカラ	[ヒ]ーマデ
芽 h0	[メー。	[メーガ	[メー]モ	[メーカラ	[メー]マデ
手 h0	[テー。	[テーガ	[テー]モ	[テーカラ	[テー]マデ

有核の助詞「も」「まで」が付き下降式無核の「下降強化」が生じる環境でも、3つの型の対立は維持される。[ハ]ーモ「葉(k1)+も」は1拍目の直後に急激な下降が生じ、2拍目の長音は完全に低い。これと比べて[カー]]モ「蚊(k0)+も」は下降の傾きが緩やかで2拍目にかけても下降が続く。[メー]モ「芽(h0)+も」は1,2拍目ともに高い。

(16)2 拍動詞の音調① (基本形・否定形・勧誘形・命令形)

語	基本形	否定形	勧誘形	命令形
置く	オ[ク!! (k0)	オ[カ!ン (k0)	オ[コ!ー (k0)	[オ]ケ (k1)
買う	カ[ウ!! (k0)	カ[ワ!ン (k0)	カ[オ!ー (k0)	[カ]エ (k1)
売る	ウ[ル!! (k0)	ウ[ラ!ン (k0)	ウ[ロ!ー (k0)	[ウ]レ (k1)
書く	カ[ク (h0)	[カ]カン (k1)	[カ]コー (k1)	カ[ケ (h0)
飲む	ノ[ム (h0)	[ノ]マン (k1)	[ノ]モー (k1)	ノ[メ (h0)
切る	キ[ル (h0)	[キ]ラン (k1)	[キ]ロー (k1)	キ[レ (h0)
居る	[オ]ル (k1)	[オ]ラン (k1)	[オ]ロー (k1)	[オ]レ (k1)
着る	キ[ル!! (k0)	[キン!! (k0)	[キョー!! (k0)	[キ]ー (k1)
見る	ミ[ル (h0)	[ミン (h0)	[ミョ]ー (k1)	[ミ]ー (k1)
出る	デ[ル (h0)	[デン (h0)	[ジョー (h0)	[デ]ー (k1)
			~[ジョ]ー (k1)	

本来、[ミョ]ー「見よう」と[ジョー「出よう」は同じ型であることが期待される。h0系列五拍動詞の勧誘形([カ]コーなどk1型)からの類推で、h0系列一段動詞の勧誘形がk1を併用しつつあるか。

(17)2 拍動詞の音調② (タ形・テミル形・チョル形・テ形命令形)

語	タ形	テミル形	チョル形	テ形命令形
置く	[オ]イタ (k1)	[オイ!テミル (k0)	[オイ]チョル (k3?)	[オイ!テ (k0)
買う	[コ]ータ (k1)	[コー!テミル (k0)	[コー]チョル (k3?)	[コー!テ (k0)
売る	[ウ]ッタ (k1)	ウッ[テ!ミル (k0)	[ウッチョ]]ル (k3?)	ウッ[テ!! (k0)
書く	[カイ]タ (h0)	[カイトミル (h0)	[カイ]チョル (h3)	[カイト (h0)
飲む	[ノン]ダ (h0)	[ノン]デミル (h0)	[ノン]ジョル (h3)	[ノン]デ (h0)
切る	キッ[タ (h0)	キッ[テミル (h0)	キッ[チョル (h3)	キッ[テ (h0)
居る	[オ]ッタ (k1)	オッ[テ!ミル (k0)	—	オッ[テ!! (k0)
着る	キ[タ]] (k1)	キ[テ!ミル (k0)	キ[チョ]]ル (k2?)	キ[テ!! (k0)
見る	[ミ]タ (k1)	ミ[テ!ミル (k0)	[ミ]ジョ]]ル (k2?)	ミ[テ!! (k0)
出る	[デ]タ (k1)	デ[テ!ミル (k0)	デ[チョ]]ル (k2?)	デ[テ!! (k0)

2 拍目が促音である場合、下降式音調の半下降が 1 拍後ろに実現する (例: ウッ[テ!!「売って」ウッ[テ!ミル「売ってみる」)。また[ウッチョ]]ルは本来同じ k0 系列の[オイ]チョル, [コー]チョルのように 2 拍目の直後に生じるべき下降が促音拍により半拍後退した音調と考えられる。

(18)3 拍動詞の音調① (基本形・否定形・勧誘形・命令形)

語	基本形	否定形	勧誘形	命令形
上がる	ア[ガ!ル (k0)	ア[ガ!ラン (k0)	ア[ガ!ロー (k0)	[ア]ガレ (k1)
みがる	ミ[ガ!ク (k0)	ミ[ガ!カン (k0)	ミ[ガ!コー (k0)	[ミ]ガケ (k1)
下がる	[サ]ガル (k1)	[サ]ガラン (k1)	[サ]ガロー (k1)	[サ]ガレ (k1)
歩く	ア[ル]ク (h0)	ア[ル]カン (h0)	ア[ル]コー (h0)	ア[ル]ケ (h2)
入る	[ハイ]ル (h0)	[ハイ]ラン (h0)	[ハイ]ロー (h0)	[ハイ]レ (h2)
上げる	ア[ゲ!ル (k0)	ア[ゲ!ン (k0)	ア[ギョ!ー (k0)	[ア]ゲヨ (k1) [ア]ゲ (k1)
止める	ヤ[メ!ル (k0)	ヤ[メ!ン (k0)	ヤ[ミョ!ー (k0)	[ヤ]メヨ (k1) [ヤ]メ (k1)
下げる	[サ]ゲル (k1)	[サ]ゲン (k1)	[サ]ギョー (k1)	サ[ゲ]ヨ (h2) サ[ゲ (h0)
起きる	[オ]キル (k1)	[オ]キン (k1)	[オ]キョー (k1)	オ[キ]ヨ (h2)
できる	[デ]キル (k1)	[デ]キン (k1)	[デ]キョー (k1)	—

(19)3 拍動詞の音調② (タ形・テミル形・チョル形・テ形命令形)

語	タ形	テミル形	チョル形	テ形命令形
上がる	[アガ]ッタ (k2)	ア[ガ!ッテミル (k0)	ア[ガ!ッチョ]ル (k4)	ア[ガ!ッテ (k0)
みがく	[ミガ]イタ (k2?)	ミ[ガ!イテミル (k0)	ミ[ガ!イチョ]ル (k4)	ミ[ガ!イテ (k0)
下がる	[サ]ガッタ (k1)	サ[ガッテミル (h0)	サ[ガッチョ]ル (h4)	サ[ガッテ (h0)
歩く	ア[ルイ]タ (h3)	ア[ルイテミル (h0)	ア[ルイチョ]ル (h4)	ア[ルイテ (h0)
入る	[ハイ]ッタ (h2)	[ハイッテミル (h0)	[ハイッチョ]ル (h4)	[ハイッテ (h0)
上げる	[ア]ゲタ (k1)	ア[ゲ!テミル(k0)	ア[ゲ]チョル (k3?)	ア[ゲ!テ (k0)
止める	[ヤ]メタ (k1)	ヤ[メ!テミル (k0)	ヤ[メ]チョル (k3?)	ヤ[メ!テ (k0)
下げる	サ[ゲ]タ (h0)	サ[ゲ]テミル (k0)	サ[ゲ]チョル (h3)	サ[ゲ]テ (h0)
起きる	オ[キ]タ (h0)	オ[キ]テミル (h0)	オ[キ]チョル (h3)	オ[キ]テ (h0)
できる	[デ]キタ (k1)	デキ[テ!ミル (k0)	デキ[テ]ョル (k3?)	[デキ!テ (k0)

デキ[テ!ミル, デキ[テ]ョルは2拍目の母音が無声化し本来2拍目の直後に生じる下降が1拍後退した形である (cf. ア[ゲ!テミル, ア[ゲ]ョル)。一方, [デキ!テは1拍目から高く, 2拍目が無声化しても下降が3拍目に後退しない, [デ!キテとも表記できる音調。

[ハイ]ッタは「歩いた」に合わせるなら h3 となるが, 促音の前後で下がり目の対立無しなら h2 と解釈できる。

(20)4 拍動詞の音調① (基本形・否定形・勧誘形・命令形)

語	基本形	否定形	勧誘形	命令形
働く	ハ[タ!ラク (k0)	ハ[タ!ラカン (k0)	ハ[タ!ラコー (k0)	ハ[タ]ラケ (k3?)
謝る	[ア]ヤマル (k1)	[ア]ヤマラン (k1)	[ア]ヤマロー (k1)	[ア]ヤマレ (k1)
頂く	イ[タダク (h0)	イ[タダカン (h0)	イ[タダコー (h0)	イ[タダ]ケ (h3)
重ねる	カ[サ!ネル (k0)	カ[サ!ネン (k0)	カ[サ!ニョー (k0)	カ[サ]ネヨ (k3?)
集める	[ア]ツメル (k1)	[ア]ツメン (k1)	[ア]ツミョー (k1)	[ア]ツメヨ (k1)
隠れる	カ[クレル (h0)	カ[クレン (h0)	カ[クリョー (h0)	カ[クレ]ヨ (h3)

(21)4 拍動詞の音調② (タ形・テミル形・チョル形・テ形命令形)

語	タ形	テミル形	チョル形	テ形命令形
働く	ハ[タ]ライタ(k3?)	ハ[タ!ライテミル(k0)	ハ[タ!ライチョ]ル(k5)	ハ[タ!ライテ(k0)
謝る	[ア]ヤマッタ(k1)	ア[ヤマッテミル(h0)	ア[ヤマッチョ]ル(h5)	ア[ヤマッテ(h0)
頂く	イ[タダ]イタ(h3)	イ[タダイテミル(h0)	イ[タダイチョ]ル(h5)	イ[タダイテ(h0)
重ねる	カ[サ]ネタ(k3?)	カ[サ!ネテミル(k0)	カ[サ!ネチョ]ル(k4)	カ[サ!ネテ(k0)
集める	[ア]ツメタ(k1)	ア[ツメテミル(h0)	ア[ツメチョ]ル(h4)	ア[ツメテ(h0)
隠れる	カ[クレ]タ(h3)	カ[クレテミル(h0)	カ[クレチョ]ル(h4)	カ[クレテ(h0)

(22)2,3 拍+2,3 拍複合名詞の音調型 (1928 年生話者調査分)

複合語	前部要素 (下降式)	複合語	複合語	前部要素 (非下降式)	複合語
口車(くちぐるま)	k0	k3	糸車(いとぐるま)	h0	h3
首飾り(くびかざり)	k0	k3, h3	松飾り(まつかざり)	h0	h3
胸飾り(むねかざり)	k1	h3			
国言葉(くにことば)	k0	k3			
京言葉(きょうことば)	k1	k3			
田舎言葉(いなかことば)	k0	k4			
魚かご(さかなかご)	k0	k4	兎かご(うさぎかご)	h0	h4
小鳥かご(ことりかご)	k0	k4	鼠かご(ねずみかご)	h0	h4
鳥かご(とりかご)	k0	k0	屑かご(くずかご)	h0	h0
芋かご(いもかご)	k1	k0	藁かご(わらかご)	h0	h0
布くず(ぬのくず)	k0	h2(k3?)	藁くず(わらくず)	h0	h0
星くず(ほしくず)	k0	h2(k3?)	糸くず(いとくず)	h0	h2(k3?)
紙くず(かみくず)	k1	h2(k3?)			
綿くず(わたくず)	k1	h2(k3?)			
鉄くず(てつくず)	k1	h2(k3?)			
壁紙(かべがみ)	k0	k0			
色紙(いろがみ)	k1	h0			
赤紙(あかがみ)	k1	h0			

おおむね前部要素の式と複合語の式が一致する「式保存」が成り立つが、例外も見られる(「赤(k1)」に対する「赤紙(h0)」, 「色(k1)」に対する「色紙(h0)」など)。ヌ[ノ]クズなどo[o]oo型に実現する語は h2 かあるいは k3 とも解釈されうる。

名詞のアクセント資料（中澤まとめ分）

ここでは4拍以上の名詞のアクセントデータ（複合名詞含む）を提示する。

複数の型が出た場合、安定していると思われる型を挙げる。一つに絞れない場合は列挙した。

語	1/22 午前分（1933年生男性）	1/22 午後分（1935年生女性）
アイイロ	h0	k0,h0
アオゾラ	k1	k1
アキカゼ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
アクルヒ	h2	h2
アサガオ	k0	k0
アサッテ	k1	k1
アシアト	h2 (k3?)	h2 (k3?)
アシクビ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
アジサイ	h0	k0,h0
アメイロ	h0	h0
イキモノ	k0	k0
イタズラ	h0	h0
イチジク	h2,h3	k0
イモート	h0,h2,k0	h2 (k3?)
イモムシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
イロガミ	h0	h0
イロジロ	h0	k0
ウグイス	k1	h2 (k3?)
ウラナイ	h0	k0
ウラニワ	h0	k0,h0
エダマメ	k0,h0	k0
オーカミ	k1	k1
オトート	k0,h0	h2 (k3?)
オトドシ	h2	h2
オヤユビ	k2?	h2 (k3?)
カイガラ	k0	k0,h0
カオイロ	k0	k0
カスガイ	h0	h0
カゼゴエ	k0	k0,h0
カナズチ	k0,h2 (k3?)	k3,h0
カミサマ	k1	k1
カミシモ	h2	h2
カミソリ	h0	h2

カミダナ	k0,h0	k0,h0
カンオケ	h0	k1,h2
カンザシ	h0	k1,h2
アマザケ	k1	h2 (k3?)
カネモチ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ニワトリ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
イノシシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
カミナリ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ニンニク	k1	k1,h2
カンヌシ	h0	h0
カンムリ	k1,h2,h3	k0
キンイロ	h0	k0
クサブエ	k0,h0	k0,h0
クスノキ	h0	h2
クチバシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
クチビル	h2 (k3?)	h2 (k3?)
クチベニ	h0	h0
クレナイ	k0	k0
クロマメ	k1,h2	h2,k1
ケギライ	k1,h2	h2
ゲタバコ	h0	h0
コーモリ	k1	k1
ココノツ	k1,h2	h2
コズカイ	k1	k1
コトワザ	k0	k0
サカズキ	h2 (k3?),h3	k0
サトイモ	k0	k0,h0
ザブトン	k1	k1
シータケ	k1	k1
シロート	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ゼンマイ	k1	k1
センセー	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ソラマメ	h0	h2
ダイコン	h0	h2
タケノコ	h0	h0
タノシミ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
タマシー	h2 (k3?)	h2 (k3?)
タンポポ	h0	h2

ツイタチ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
テツダイ	h2 (k3?)	k0
テンジョー	h0	h0
テンプラ	h0	h0
トシヨリ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
トモダチ	k0	k0
ナガイキ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ナカユビ	h0	h0,h2
ナデシコ	h2	h2
ニョーボー	k1	k1
ノコギリ	h2	h2
ハイイロ	h0	k0
ハナビラ	h0	k0
ハナミズ	k0	h2 (k3?)
ハナムコ	k0	h2 (k3?)
ハマグリ	k0	k0,h0
ハリガネ	h0	h0
ヒョータン	h2 (k3?)	h2 (k3?)
フデバコ	h0	h0
フトコロ	k0	k0
フルサト	h2 (k3?)	h2 (k3?)
フロシキ	h0	k1
ホシガキ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
マナイタ	h2	h2
マボロシ	k0	h0,h3
ミギアシ	h0	h0
ミギカタ	h0	h0
ミギヒザ	k0	k0
ミズアメ	k0	k0
ミズイロ	h0	h0
ミズウミ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ミズムシ	k0	h2 (k3?)
ミソシル	h2	h2
ムラサキ	h0	h3
モノサシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ユーガタ	h0	h0
オトコトモダチ	h4	h4
ヒトズキアイ	h2 (k3?),h3	h3

ナマクリーム	h4	h4
クサカムリ	h2 (k3?)	h2 (k3?),h3
アオムラサキ	h4	h0,h6
サケマンジュー	h2 (k3?)	h3
ゴムテブクロ	h3,h4	h3,h4
デンキガミソリ	h4	h4,h5
ヌカヨロコビ	h2 (k3?),h3	h0,h4
イトコンニャク	h3	h3,h4
タマコンニャク	h2 (k3?),h3	h3,h4
ユキガミナリ	h3	h3,h4
シタバタラキ	k0,h0	h3,h4,h5
タダバタラキ	h0	h4,h5,h0
ハナバタケ	h2 (k3?)	h2
ムギバタケ	h2	h0
モモバタケ	h2 (k3?)	h4
ニワシゴト	h2 (k3?)	h2 (k3?),h3
ヤマシゴト	h2 (k3?),h3	h2 (k3?),h3
ハリシゴト	h2	h3
チカラシゴト	h4	h4
ハタケシゴト	h4	h4
ナツマツリ	h2 (k3?)	h3
アキマツリ	h2 (k3?)	h3
サクラマツリ	k4	h4
モミジマツリ	k4	h4
ハダカマツリ	h4	h4
タケバヤシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
クリバヤシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
マツバヤシ	h0,h3	h2,h3
オトコオヤ	k0,h0	h0
オトコモノ	k0,h0	h0
ムスメムコ	k4	h4
オトコギライ	h4	h4
サカナギライ	k4	h4
クスリギライ	h4	h4
ワサビギライ	k4	h4
コトバズカイ	h0	h4
ココロズカイ	k4,h4	h4
カネズカイ	k0,h2 (k3?)	k0

ヒトズカイ	h3	k0,h2,h3
イキズカイ	h3	h0
オモテガワ	k0	h0
ヒガシガワ	k0	k0
ムコーガワ	k0	k0
ヒダリガワ	h0	h0
ウシロガワ	k0	h0
ニシガワ	k0	k0
ウチガワ	k0	k0,h0
ソトガワ	h0	h0
カザグルマ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
カタグルマ	h2	h0
オモテムキ	k0	h0
ヒガシムキ	k0	k0,h0
ヒダリムキ	h0	h0
ウシロムキ	k0	h0
ニシムキ	k0	k0
ウチムキ	k0	h0
ソトムキ	h0	h0
イトグルマ	h2	h0
ミズムシ	k0	h2 (k3?)
イモムシ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
マツムシ	h0	h2
フデバコ	h0	h0
カミバコ	k0,h0	h0
ゲタバコ	h0	h0
タカラバコ	k4	k4
カガミバコ	k4	k4
スズリバコ	k4	k4
ドーグバコ	k4	k4
クスリバコ	h4	h4
ミカンバコ	h3	h3
カガミモチ	k4,h4	k4
サクラモチ	h4	h4
ヨモギモチ	h4	h4
カタナガリ	k4	h4
モミジガリ	k4	k4
ウサギガリ	h4	h0

コメズクリ	h2 (k3?),h3	h2 (k3?)
クニズクリ	h2 (k3?)	h2 (k3?)
ミソズクリ	h3	h0,h3
ウチワズクリ	k4	k4,h4
カタナズクリ	k4	h4
キューリズクリ	h4	k4,h4
オトナムケ	k0	h0
コドモムケ	k0	k0
オトコムケ	k0	k0,h0
オヤコムケ	h0	h0
アイダガラ	k0	
ハキソージ	h2 (k3?)	
オトコオヤ	k0	
オトシダマ	h0	
シアサッテ	k1	
カタグルマ	h2	
ウミボーズ	h3	
ウンテンシュ	h3	
ミギヒダリ	h3	
イキカエリ	h3	

複合名詞アクセント補遺資料

複合名詞の前部要素を中心としたアクセントデータを提示する（データは 1933 年生男性のもの。）

アキ「秋」	k1	スズリ	k1
イキ「息」	h0	ソト	h0
イト「糸」	h0	タカラ	k0
イモ	k1	タケ「竹」	k0
ウサギ	h0	チカラ	k1
ウシロ	k1	ドーグ	k1
ウチ「内」	k0	ナツ	k1
ウチワ	k1	ニシ	k0
オトコ	k1	ニワ「庭」	k0
オトナ	h2	ハダカ	k0
オモテ	k1	ハタケ	h0
オヤコ	h0	ハナ「花」	k1
カガミ	k1	ハリ	h0
カゼ「風」	k0	ヒガシ	k1

カタ「肩」	h0	ヒダリ	h0
カタナ	k1	ヒト	k1
カネ「金」	k0	フデ	k0
カミ「紙」	k1	マツ	h0
キューリ	k1	ミカン	h2
クスリ	h0	ミズ	k0
クニ	k0	ミソ	h0
クリ	k1	ムギ	h0
ゲタ	h0	ムコー	k0
ココロ	k1	ムスメ	k1
コトバ	k1	モミジ	k1
コドモ	k0	モモ	k0
コメ	k1	ヤマ	k1
サカナ	k0	ヨモギ	h0
サクラ	k0	ワサビ	k1